

令和2年度 長崎市自然環境調査報告書:植物

長崎市自然環境調査委員 中西 弘樹

1. 長崎市から初めて発見された植物

○リュウキュウイタチシダ (オシダ科) (図1)

ナガバノイタチシダの変種で、それに似ていますが、それよりも小型で、葉身の中央部羽片の小羽片の着き方で区別できます。ナガバノイタチシダでは下部の小羽片が先に着きますが、本変種は対生するか上部の小羽片がやや先に着く特徴があります。佐世保市の堆積岩地帯の崖地には多く群生していますが、長崎市ではまれに生育しているだけです。長崎市のものは詳細に調べる必要があります。



図1. リュウキュウイタチシダ

○トヨラクサイチゴ (バラ科) (図2)

クサイチゴとカジイチゴの雑種は3つのタイプがあることが知られています。長崎市で発見したものを調べた結果、果実が熟さないことなどから、トヨラクサイチゴであることがわかりました。葉は三小葉、裏面や葉枝は軟毛が密生しています。花枝につく葉は小さく、小葉は柄がなく、長さ3~5.5cm、頂小葉は長楕円形、尖鋭頭、基部はくさび形です。しかし、徒長枝につく葉は大きく、葉身は長さ約16cm、幅約8cm、頂小葉は2~4mmの小葉柄があります。詳しいことは中西(2020)に記録しております。



図2. トヨラクサイチゴ

○ヤマトラノオ (オオバコ科) (図3)

本種とよく似たホソバヒメトラノオは各地の草原に生育しており、長崎市においても山頂部の草地に知られています。ホソバヒメトラノオの生育している市内北部の草地に、ヤマトラノオを長崎県で初めて発見することができました。ホソバヒメトラノオよりも小型で、葉は長楕円形をしており、花冠の筒部が短く、花冠が深く裂けていることや、毛の状態が違うなど多くの点が違っています。県内のホソバヒメトラノオの生育地をもう一度調査する必要があるかも知れません。



図3. ヤマトラノオ

2. 再発見された植物

○ナガサキシダモドキ（オシダ科）（図4）

最初長崎県で発見されたシダ植物で、今ではナガサキシダとクマワラビの雑種と考えられています。岩屋山には古くから知られていましたが、長崎大水害で流出したと言われていました。しかし、その後新しい生育地が発見されました。その生育地も数年発見されませんでしたでしたが、2020年の夏になって1枚葉が出てきて、再発見することができました。雑種のせいか、葉は変異が大きく、しばしば不規則に切れ込みます。



図4. ナガサキシダモドキ

3. 長崎市から新しく発見された外来植物

○カッコウアザミ（キク科）（図5）

熱帯アメリカ原産の外来植物で、空き地や畑地の雑草となっています。長崎市では畦別当町に群生していました。よく似たムラサキカッコウアザミも野生化していますが、こちらの方はやや小型ですが、花は少し大きくて美しいので、栽培されます。どちらも一年草で、今のところ外来植物に悪い影響を与えていることは知られていません。



図5. カッコウアザミ

○ヒメセンナリホオズキ（ナス科）

北アメリカ原産の外来植物で、耕作地周辺の雑草となっています。式見町の牧場付近で発見することができました。よく枝分かれし、1株で大きな面積を占めることがあります。繁殖力はそれほど大きくはなく、今後各地に広がっていくことは少ないでしょう。

4. 発見された貴重植物

○ヒュウガシダ（イワデンダ科）

シロヤマシダやコクモウクジャクと似ており、小さい個体では区別が難しい。コクモウクジャクよりも大きくなり、葉柄下部には鱗片が多く、その点ではシロヤマシダと異なります。小裂片の切れ込みはコクモウクジャクよりも深く、基部は浅い心形となり、胞子囊群は縁辺と中肋の中間に着く。旧長崎市南部にも生育していましたが、シカの食害で絶滅してしまいました。今回新たに岩屋山に群生していることを確認しました。



図6. ヒメフタバラン

○ヒメフタバラン（ラン科）（図6）

古くから本河内水源地の森に知られていましたが、イノシシの攪乱によって最近は見なくなりました。10年ほど前に畦別当町で発見し、そこは今でも生育していますが、今年になって東長崎でも発見することができました。小型の植物で、3月ごろ小さな花を咲かせ、夏には枯れてしまいます。

○ツルナシコアゼガヤツリ（カヤツリグサ科）

コアゼガヤツリに似ていますが、匍匐する根茎がなく、株は叢生します。茎の高さは15～25cmで、基部は赤みを帯びます。最近になって長崎県内にも広く分布することがわかってきましたが、ややまれです。溜め池や放棄水田などに生育しています。長崎市内では旧琴海町で発見されました。

○ヒオオギ（アヤメ科）

古くから園芸植物として栽培され、万葉植物としても知られています。庭園に栽培されているものは野生のものを園芸化したもので、野生のものと比べて全体に大きく、花も大きく美しい特徴があります。野生のものは尾根部の岩場に生育しています。長崎市内にも知られていますが、北部の山地からも発見できました。

○ハマキイチゴ（バラ科）

一名マルバモミジイチゴ。葉は広卵形または卵円形、3～5に浅裂または中裂します。葉表はやや光沢があり、脈がへこみます。花は少なく、果実は橙色となります。ハチジョウイチゴとモミジイチゴの雑種と考えられています。長崎県では沿岸部にまれに生育し、長崎市ではこれまで野母崎町で発見されましたが、田手原町でも発見できました。



図7. ハマキイチゴ

○バリバリノキ（クスノキ科）

山地の照葉樹林内に生育する常緑高木で、県内に広く分布しますが、個体数は少ない。多良山系や五島列島にはやや多いのですが、その他の地域にはまれです。長崎市内ではごくまれですが、岩屋山北部の谷には多いことがわかりました。特に一つの谷には100株以上が生育していて、県内で最も多い地域です。

○シマキケマン（ケシ科）

ケシ科キケマン属で低地に生育しているものは、キケマンやツクシキケマン、ムラサキケマンなどふつうに見られるものが多い。その中で、シマキケマンはまれで、県内ではこれまで長崎市、諫早市、南島原市、時津町、長与町から知られていました。長崎市では西海岸の一部に発見されていましたが、東長崎でも発見することができました。本種は民家



図8. シマキケマン

の古い石垣などに生育していますが、そのような環境が少なくなったので、本種も少なくなっただと思われます。

○ヒナノシャクジョウ（シャクジョウ科）

湿った林床や溪流のコケの中に生育する高さ2～5 cmの白色の腐生植物です。葉は退化し、鱗片状で、茎の先端に花が数個以上集まって着きます。県内にまれに生育していますが、長崎市の北部から西彼杵半島の谷には多く生育していることがわかりました。7月下旬から10月にかけて、上流の溪谷のコケが多く生育している所を探すとよく見られます。



図 9. ヒナノシャクジョウ

5. 地球温暖化による植物の分布拡大

温暖化によって生物季節が変化したり、暖かい地方に生息・生育していた生物が北の地方まで分布を拡大していることが知られています。昆虫ではかつては九州以南に知られていたイシガケチョウが近畿地方で見られるようになりましたし、ナガサキアゲハも関東地方にまで知られるようになりました。また、海中でも長崎県の海域で、亜熱帯性の魚類が多く見られるようになっています。植物は動物のように温暖化に伴う素早い反応はありませんが、種子が海流で運ばれたり、風で運ばれる植物は少しずつ北上していることがわかってきました。海流散布植物ではグンバイヒルガオがよく知られ、長崎県でも定着しているところがあります。長崎市では西出津町の海岸に生育し、花も咲いていましたが、数年前の台風によって流出してしまいました。風散布植物では特に孢子で繁殖するシダ植物がその代表的なものです。長崎市ではかつては五島列島でしか知られていなかったヘゴ、リュウビンタイやケホシダが発見されていますが、温暖化と関係があると考えられます。今年になってオオタニワタリが発見されました。オオタニワタリは庭園などで栽培されていますので、そこから孢子が飛んで繁殖したと思われる個体が、町の中の石垣や溝などに見つかることがあります。そのような個体は国内外来種とよばれています。今回発見されたものは山深い谷に崖地で、南方から飛来した孢子による自然分布と考えられます。



図 10. オオタニワタリ

引用文献

中西弘樹 2020 トヨラクサイチゴ (*Rubus ×toyorensis* Koidz.) 長崎県に発見. 長崎県生物学会誌 87: 17-18.